

早稲田大学ドイツ語学・文学会  
第9回研究発表会研究発表要旨

「魔術的政治小説」というジャンル  
—ドイツの「秘密結社小説」の英国における受容—

亀井伸治

1790年代、英国の翻訳シーンに、恐怖小説を含むドイツの文学作品の急激な流入が始った。それは、ゴシック小説にも新たな局面を齎した。フリードリヒ・シラーの『見霊者』、カエタン・チンクの『ある見霊者の物語』そしてカール・グロッセの『守護霊』といったドイツの「秘密結社小説」の英訳作品を中心とし「魔術的政治小説」という名称で統括され得る小説ジャンルの形成は、その一つの結果である。フランス革命期のように、一つの世界構造が崩壊し、社会が有機的繋がりを喪失して、その諸部分が断片へと解体されるとき、そうして、それまでの存在根拠たる原理を失った人間が、自身の行為と心理の調和への信頼をなくすとき、生活スタイルが混乱を来すように、芸術においても、内容と様式の両面における混乱と混淆が生じて来る。われわれは、こうした時代状況の文学への反映を、上記のジャンルに見出すことができる。不思議な隠蔽と、悪夢的現実の暴露が描かれるそれらの物語では、十八世紀後半のヨーロッパにおける政治的擾乱、当時の社会秩序や価値概念に対する転覆への不安、そしてさまざまな非合理的要素が、主にイルミナーティとイエズス会をモデルとして造形された秘密結社のモチーフの内に溶け合わされている。このようにして、ゴシック小説のルールにおいて次第に限定されて行つた恐怖のコードが、当時の国際的陰謀の脅威によって補われたとき、ゴシック小説のイメージは、これまでにない大規模な空間的スケールで展開されることになった。

このジャンルの作品は、秘密結社による主人公の自我とそれを取り巻く世界を破壊しようとする試みを物語る。それは、国家公民的アイデンティティや家族の絆の破棄などとして描き出される。それ故に主人公は、あらゆる存在が不可知の力の脅威に晒される空間の中で、自分のアイデンティティを再発見するべく探求を続けねばならない。だが、その探求の過程では、彼はただ空しく暗号めいた諸断片を拾い集めることができるだけである。ところが最後に、秘密結社の前景化において結社の真の性格が明らかになると、物語は、それまでの迷宮的記述が、実は、隠された秩序の全容を発見するに至るまでの試行錯誤を表現する手裏に過ぎなかったということを読者に提示する。すなわち、脅威的で混乱した状態が消滅し、読者の眼前には新たに、一個の完結した世界秩序が現出するのだ。すると、秘密結社の秩序と物語世界の構造が重なり合うそのテキストはもはや、啓蒙主義文学のように作者の理念を伝達するだけの媒体に還元されるものではなくなる。秘密結社についての小説は、そのテキスト自体において自らの主題を体現するのである。